



追悼 榎田一路先生  
1968-2022

広島大学外国語教育研究センター准教授

日本コンラッド協会会長  
2016年4月～2020年3月

## 榎田一路先生 著作目録\*

### 著書

2005 『コンラッドの小説—風土・他者・言語』. 広島：安田女子大学言語文化研究所. 75p.

### 論文

2023 “Communication with Marconi’s Electric Waves: Conrad and Wireless Telegraphy.” In *Conrad without Borders: Transcultural and Transtextual Perspectives*, ed. Brendan Kavanagh et al., 145-157. London: Bloomsbury.

2020 “Communication with Marconi’s Electric Waves: Conrad and Wireless Telegraphy.” *The Conradian* 45, no. 1, 116-127.

2020 “Memories of Sail and Steam in Joseph Conrad’s ‘Youth’” (共著 Walter Davies and Simon Fraser). 『広島外国語教育研究』, no. 23: 149-161.

2019 「その電信的文体の愚かしさ—『闇の奥』と同時代のメディアテクノロジー」. 『日本英文学会関西支部第13回（2018年度）Proceedings』.

2018 “Speech Acts in Three of Joseph Conrad’s Marlow Stories” (共著 Walter Davies and Simon Fraser). 『広島外国語教育研究』, no. 21: 85-98.

2017 “The Bitter Taste of Meat Extract and Labels in ‘An Anarchist’” 『コンラッド研究』（日本コンラッド協会）, no. 8: 1-13.

2006 「“Amy Foster”における想像力」. *Phoenix* (広島大学文学研究科英文学会), no. 65:1-13.

### 書評・新刊紹介

2013 山本薫著『「自己」の向こうへ—コンラッド中・短編小説を読む』. 『コンラッド研究』, no. 4: 35-39.

2004 杉浦廣治著『コンラッド「闇の奥」の研究—帝国主義と文明と』. 『英語青年』2月号.

1993 Keith Carabine, ed., *Joseph Conrad: Critical Assessments*, Vols. 1-4. 『英語英文学研究』（広島大学英文学会）, No. 37.

**学会報告**

2017 「ジョウゼフ・コンラッド協会（英国） 第 42 回年次大会」．『コンラッド研究』, no. 8: 93-95.

2015 「ジョウゼフ・コンラッド協会（英国） 第 40 回年次大会」．『コンラッド研究』, no. 6: 56-59.

\*コンラッド研究に限っての著作目録

## 榎田先生の思い出

設楽靖子

榎田先生は、日本コンラッド協会が 2009 年に設立された当初から会員になられ、以来、年 1 回の総会では欠かさずお会いしてきました。まもなく運営委員に加わっていただき、運営委員会でもお会いするようになり、その後会長に推薦されて、2016 年度から 2019 年度までの 4 年間、つまりコロナ禍の直前まで、2 期にわたって会長を引き受けてくださいました。

会長でいらした 4 年間には、年刊の学会誌『コンラッド研究』の編集委員であり、特に、2017 年と 2019 年の全国大会では、海外からの参加者も含めたプログラムの調整と開催を先導いただきました。

会長という立場は、会の顔として重荷なこともあったでしょうが、一方で、世界の第一線の研究者と直接メール往復をし、最新の研究情報に常時接するという刺激的な要素もあります。先生は、そのプラスの要素を意識なさって、ご自身が海外に向かう原動力になさったと思います。

具体的には、2014 年に初めてイギリス・コンラッド協会の年次大会（セント大学）に参加なさり、その様子をこの『コンラッド研究』に学会報告として載せていらっしゃいます。コンラッドゆかりの地を回る機会もあって「研究者冥利に尽きる」経験だったとのこと。次いで 2016 年エジンバラでの大会で口頭発表なさり、それを翌年の『コンラッド研究』に論文として載せる。続いて 2019 年ロンドンの大会で口頭発表なさり、翌年 *The Conradian* に論文掲載されました。このとき、先生はコンラッド研究者として一つの目標を達成できたという実感を持たれたと想像します。

思い返すに、私は榎田先生とは協会の設立より前にお会いしていました。ちょうど 20 年前、2002 年 8 月にカナダ・バンクーバーのブリティッシュコロンビア大学での *Conrad and Territoriality* と題された国際学会の場で、今は亡き Najder 氏や Stape 氏の存在感が窺える大会でした。たまたま会場の建物の外で若い日本人男性を見かけて声をかけたところ、安田女子大学・助教授の名刺をくださり、「自分は国際学会に慣れておらず、事前登録もしていないのですが、近くに来るついでがあり、様子だけでもと思って来ました。入っていいのでしょうか」と、とても謙虚に自己紹介なさいました。私は、「是非お入りになったら」と答えて、そのままお別れしました。

その後、2007年に日本英文学会でお見かけし、「あー、あのときの」と再会しました。そのときはすでに広島大学に移られて、本も1冊刊行なさっていました。そうしたご縁で、本協会の設立と同時に会員になられました。

2002年にバンクーバーでお見かけした謙虚な若手研究者が、10数年後にはコンラッドの名を冠した協会の会長となり、洋書の背表紙でしか縁がないような研究者を日本での学会に呼んで国際会議を仕切り、一方ではイギリスの学会で口頭発表をし、イギリスの学会誌に論文を掲載なさった、そのように一步一步階段を上っていく姿を折に触れて拝見してきました。

そして今年、5月9日に事務連絡のメールを送った数日後、「入院しています。少なくとも2週間はこの状態です」という返信がありました。ご事情はあえてお尋ねせずにいたところ、5月31日に、突然、広島大学外国語教育研究センター長・阪上先生から協会宛に訃報が届きました。そして、7月31日の広島での「偲ぶ会」に行き初めて、先生は1年前の6月に原発不明癌という診断を受けて闘病中でいらしたことを知りました。

先生に当協会の会員がお目にかかった最後は、3月31日のオンライン運営委員会でした。「そういえば、榎田先生は会の間ほとんど発言なさらず、最後に何かおっしゃりかけた気がする」と言った人がいます。私もそんな気がします。先生はご自身の病状について何かおっしゃりかけたのかも知れませんが、でも、おそらく、私たちには何も言わないと決めていらしたのだと思います。

最後に、榎田先生は、いつも「広島」の榎田先生だったと思います。出身地の国立大学に進まれ、そこで研究テーマと出会って大学院で研鑽なさり、出身大学で職を得て、英語教育の分野で地元に戻元しようとなさった。同時に、そこを根拠地にしてコンラッド研究者として世界に出ていこうとなさった。その場所は、他のどこでもなく、広島でした。イギリス、アメリカ、ポーランドを含め、海外の学会や研究者に日本コンラッド協会から連絡が行くとき、2016年～19年の間、メール末尾には常にHiroshimaの住所がありました。その都市名とともに発信していくことに先生は意識的ではなかったのではないか。「榎田先生を偲ぶ会」に参加しに広島へ行った際、そのことに思い当たりました。

(しだら やすこ 日本コンラッド協会会員)

## 榎田先生の思い出

岩清水 由美子

榎田先生に初めてお会いしたのは、2012年のコンラッド協会の総会の場だったと思う。その時私が会長に推挙され、榎田先生が運営委員となり、会計を任せられたのだった。会計を依頼された時は驚かれたようだったが、快諾していただいた。その後4年間にわたって会計を務めてくださったが、2回の全国大会で英語発表の司会をしてくださったりして、運営委員としても立派に務めを果たしていただいた。東京での大会の時は、汗を流しながら立看板を運ばれていたのを鮮明に覚えている。

榎田先生は4年間の会計を務められた後、会長に推薦された。私が会長職を正式にお願いした時、榎田先生は「私のような者に会長が務まるでしょうか」と言われたが、引継ぎを丁寧にやることを約束し、引き受けていただいた。その後4年間会長職を立派に務めてくださったことは、運営委員の皆さんや会員の方が感じておられたらと思う。特に私が感心したのは、榎田先生が会長の仕事に自ら進んで積極的に取り組み、しかもどこか楽しそうにされていたことである。

しかしながら、色々な思い出の中で一番心に残っているのは、榎田先生が拙著『コンラッドの小説におけるジェンダー表象——ミソジニストをこえて』の査読を引き受けてくださったことである。まず驚いたのは、査読講評がとても詳しく具体的で、原稿の書き直しに大変役立った。そしてその講評の中には、書名をもっと内容が分かるようなものに変えてはどうかという提案があった。3つほど提案されていたが、私はその中で最も気に入った副題を選ばせてもらった。本を出版するまでには色々な方にお世話になったが、このような経緯から、私はこの本が榎田先生との合作のように感じていた。その後、私たち編集委員は榎田先生に拙著の書評までお願いしたのだが、査読をしたという成り行きもあるのでと言われ、こちらも快諾してくださった。それで、3月、4月と原稿を待っていたのだが、結局、原稿を受け取ることはなかった。5月に入って入院されていることを知ったのは、青天の霹靂だった。それでも、きっと退院され、総会では笑顔を見せてくださると思っていた。幸い、私の本の書評は井上真理先生が書いてくださり、立派な書評が今号の『コンラッド研究』に掲載されている。

榎田先生も喜ばれているのではないだろうか。

榎田先生はどこかシャイな方だったが、大変責任感が強く努力家であったと思う。そんな榎田先生がなぜ働き盛りに家族や友人を残して逝かなければならなかったのか、未だに理解できない。榎田先生のこれまでのご尽力と日本コンラッド協会に対する多大なる貢献に対し、この場を借りて改めて敬意と感謝の念を表したい。

(いwashimizu ゆみこ 長崎県立大学 教授)

## 榎田先生が目指したもの

奥田洋子

榎田一路先生とは、長年同じ学会に属しながら、残念なことに仕事以外の話をした記憶があまりない。学会や委員会で顔を合わせても、お互い忙しくて雑談する暇などなかったからだろう。

ところが今ごろになって、五十を超えたばかりで逝ってしまわれた先生が、研究者として、またこの学会の一員として、何を目指していらっしかったのか知りたいという気持ちがわいてきた。そこで先日、パソコンに保存されていた先生からのメールを開いてみた。

2018年7月から2021年11月までに交わしたメールはわずか13通で、その内容のほとんどは、コンラッド協会についてのこまごまとした連絡や相談である。総会について、査読について、また全国大会について。

しかし、何回も繰り返し読んでいるうちに、印象に残るフレーズがいくつか浮かび上がってきた。たとえば、英国の大学には研究者同士が発表済みの論文を持ち寄ってコメントし合うという少し変わった勉強会があるので私たちもやってみてはどうだろう、と提案したところ、「良い案だと思います。最近、例会がほぼ開店休業状態でもったいないので、これを活用するのはどうでしょう。例えば、ご提案のことを関東と関西でそれぞれ必ず年1回は行くとか」(2019年3月付)、と意外なほど積極的な返事が返って来た。当時の会長として会員同士が互いに切磋琢磨し合う場を提供したいという先生の思いが感じられる。あれをやっていたら榎田先生の研究についてもっと知ることができたかもしれない、と悔やまれる。

英語の投稿論文の査読者をめぐる相談では、私が推薦した英国人の査読者について、「私自身が査読していただきたいほどです」(2019年12月付)と言っている。2014年と2016年と二回にわたり英国の国際学会で研究発表をされた先生の意気込みが感じられる。2016年の英国の学会のホームページのアーカイブには、ネクタイを締め神妙な顔で原稿を読む榎田先生の写真がある。大学院生のときには、サセックス大学に留学してセドリック・ウォッツ先生の指導を受けるのが夢だったようだ。

理想的な会長としては、「ネットを駆使しつつ、協会の存在感を国内外に発信できる方が適任と思っています」(2021年11月付)と述べ、この協会を、同好会のような内向きな会ではなく、国内のみならず海外でも一目置かれるような学会にしたいという願いが伝わって来る。

これらの言葉の端々に窺えるのは、海外の習慣でも良いものはどんどん取り入れて行こうとするポジティブな姿勢であり、自分ももっと英語の論文を書く力を磨いて世界に発信して行きたいという願望であり、また、この学会の将来に対する期待である。

榎田先生の、大リーグを目指す若き野球選手のようなこの志は、昨年末に出版された *Conrad without Borders: Transcultural and Transtextual Perspectives* (London & New York: Bloomsbury Publishing) に収録された論文が、亡くなられた後に刊行された唯一の論文であるという事実によっても裏付けられているのではないだろうか。

これからの協会の運営に、少しでも榎田先生の目指したものを反映させて行きたい。

(おくだ ようこ 跡見学園女子大学 名誉教授)

## 榎田先生の思い出

田中賢司

篤実で奥ゆかしく、期日を守りつつ学会業務を航行していく。私が榎田一路氏に抱いている第一印象はこれに尽きる。

榎田先生との思い出で最も記憶に残っているのは、日本英文学会の全国大会(2019年於安田女子大学)において、寺西雅之先生とのつながりから私



にパネルディスカッションの登壇の機会を与えて下さったことである。寺西先生を交えての榎田先生のお話自体の面白さもさることながら、船員の職業人としての英語教育をコンラッド文学における船員教育とどう結ぶかについて深い関心を抱いていただいた。医学教育と人間形成を論じられた小比賀美香子先生（岡山大学）とも、並んで話をさせていただいた。大変貴重な体験をさせていただき、誠に感謝に堪えない。

榎田先生は、あの優しい丸い目で話し相手をじっと見つめながら、ユーモラスな表情でさりげなく語る様子があたたかく、話していても心地よい方である。外国語教育研究センターにおられたことと関係するのだろうか、コンラッドが訪れた東南アジアの国々における現代の文化事情についても非常にお詳しかった。コンラッドの「闇の奥」を原作とする映画「地獄の黙示録」について私が言及したときも、*Heart of Darkness* という銘柄のビールがベトナムにあることを教えて下さった。そのようなものがあると知らなかった私は、非常に驚いた。

日本コンラッド協会の全国大会で、海外から名だたる研究者をお迎えした時のことも忘れがたい。京都の佛教大学二条駅近くの美しいキャンパスで開催された当会では、穏やかに落ち着いた日本コンラッド協会会長であった榎田先生の英語の声と落ち着いた表情が今も記憶に焼き付いている。

2015年には、遅れてしまった「帆船フェスタひろしま 2015」の知らせに応じても下さり、ご家族とともにわざわざ車で宇品外貿埠頭第5バースまで日本丸を観に来て下さった。コロナ禍において、詳しいお話を聞くこともできず、今生のお別れをすることとなってしまった。これからはなさることができたであろう研究の発展性を考えると、大いに悔やまれる。榎田一路氏のご家族が、どうかあの誠実なお気持ちを長くご記憶にとどめられ、また遺された当会の今後の未来が、お名前の通り「一路」に発展するものであってほしい、と祈るばかりである。ご冥福をお祈りいたします。

（たなか けんじ 海技大学校 教授）

## 榎田一路先生の思い出 —日本英文学会中四国支部での交流を中心に

渡邊 浩

私は2015年（平成27年）に日本コンラッド協会に入会させていただきました。以来、協会と先生方にははすっきりお世話になっておりますが、特に榎田先生には、日本英文学会中国四国支部の活動を通して大変親切にしてくださいました。

実は、榎田先生に最初にお会いしたのは、日本コンラッド協会にお世話になる以前にさかのぼります。それは2013年10月に山口大学で開催された日本英文学会中国四国支部、第66回大会で私が「テロリストの孤独—『密偵』における反秩序」というタイトルで研究発表をさせていただいた折のことです。その時、私は、バーロックの「孤独」について、文明論的な話題を下敷きにしながら論を展開した記憶がありました。その時、榎田先生も会場に来られており、「コンラッドの主人公たちは、文明の狭間で孤独になることが、確かに傾向性としてありますね」といったご意見をいただいたことを覚えています。

忘れられない思い出の1つは、2017年に就実大学で第70回大会を開催させていただいた折のことです。年度初めから開催に向けて様々な準備をすることになりましたが、榎田先生からも主催者側からの運営の流れや問題点、また特に配慮が必要なこと等などについてもお話を伺い、開催が順調に運ぶようにご助力いただきました。雨天に見舞われたものの無事終了し、会の発展を祈らせていただきました。

2018年、第71回大会では、鳥取大学で開催され、「カリカチュアから見るテロリストの類型」というタイトルで発表させていただきましたが、その折にも榎田先生は会場にみえられ、「肝心のバーロックは、他のテロリストに比べると、一つの類型にあてはめることは難しいですね」という発言をいただき、確かに分析が難しいキャラクターであることに改めて気づかされた記憶があります。2019年の第72回大会では、榎田先生自身が『読む』から『創る』へ—多読教材を用いたデジタル二次創作活動—という演題で研究発表をされ、コンラッド研究の他に英語教育の面でも大きな貢

## エッセイ

献をされていることに感心いたしました。

今思い返しますと、先生の親切で温かい人柄と、常にベストを尽くそうとする生き方が強く記憶に残っております。先生の姿を通して、私も大いに励みになり、元気づけられました。この度は、日本英文学会中国四国支部での先生の思い出を中心に書かせていただきましたが、その他、コンラッド協会における研究や論文発表の際にも様々お世話になりましたことは言うまでもありません。

お亡くなりになる数ヵ月前にも、元気なお姿を拝見しておりましたので、急なご逝去が悔やまれてなりません。しかし、ご自分のご苦勞やご病気のことでも語らずに、最後まで、専門研究と英語教育に情熱をもって取り組んでいた姿こそが、先生の一番大きなメッセージではなかったかと存じます。先生のご冥福をお祈りするとともに、先生の遺志を継いで、貢献の道を探り進むことが後に残った者の使命ではと気持ちを新たにしているところです。

(わたなべ ひろし 就実大学 教授)



2017年11月 第3回全国大会にて  
(Prof. Richard Ambrosini と)